

書評

北海道考古学の直近 20 年を俯瞰する

書名 北海道考古学の最前線
 刊行 2023 年 6 月 25 日
 編者 高瀬 克範
 発行 雄山閣



編者の高瀬氏は北海道考古学の直近 20 年は次の 4 点の特徴があると述べます。

1. 国際的な研究グループによる研究実践の常態化
2. 理化学的な研究の増加・定着
3. アイヌ民族への配慮や敬意
4. 発掘調査の急速な減少

5.1 「アイヌ文化期」のはらむ問題

北海道考古学が設定する「アイヌ文化期」は「アイヌとその祖先の人々が歩んだ歴史の継続性について、誤解をあたえかねない枠組みとなっている」(p11)と述べます。単なる考古学的文化名称に社会的意味が付与されてしまい、研究成果の正確な伝達が阻害されています。

本書では箕島栄紀氏が「アイヌ史の時代区分」(146-150)としてこの問題に関する項を立て、時代区分用語としての「アイヌ文化期」成立経過に言及しています。箕島氏は、研究史的には擦文文化期とアイヌ文化期は連続性を持つものとして認識、設定されたことを強調する一方、アイヌ文化を先史文化の残存として捉える認識がつきまとっていたとも述べます。

また定義としての「アイヌ文化」は、そもそもそれを規定するのがマジョリティたる和人研究者である点に公正性の欠如があり(佐々木 1974)、それは当会第 41 回情報交換会の佐藤剛氏による批判とも共通します(石井 2021)。

5.2 北海道考古学の総覧として

高瀬氏が序章で述べるとおり、本書はこの 20 年の北海道考古学の研究の進展を俯瞰できる内容となっています。目次を通覧して気づくのは、自然科学的分析を主軸とする論考が多く含まれること、それらが自然科学を専門とする研究者ではなく、考古学者によってプロデュースされていることです。このことは、直近 20 年の北海道考古学における自然科学的分析利用の関係性そのものの変化を示しています。

5.3 過去資料の利活用

「収蔵庫の時代の博物館」と呼ばれる時代です。過去に発掘調査された考古資料も収蔵庫の空間を費やす大きな負債となりえます。負債を財産に変える方策は蓄積された膨大な資料を活用するための円滑な世代交代であることは高瀬氏が述べるとおりです。本書の中で残念な点があるとすれば、資料活用やパブリック・アーケオロジ的な視点の論考がほとんど見られなかったことです。

逆に言うならば、次の 20 年に向けて我々が真剣に考えるべきは、本書で十分に語られていないこと、すなわち資料の利活用と考古資料の社会的活用なのではないかと感じました。

参考文献

- 石井淳平 2021 「特別講演「ユベオッ(続縄文)時代の概説」記録」『南北北海道考古学情報』第 15 号, pp. 1-3
 佐々木昌雄 1974 「<アイヌ学>者の発想と論理一百年間、見られてきた側から」『アスタリアイヌ』第 8 号

石井淳平(あっさぶ文化遺産調査プロジェクト)